

我が国の子どもの生活と地域連携の歴史からの一考察 —「小学校と大学の連携授業」の可能性を追って—

A Consideration from the History of Children's Life and Regional Cooperation in Japan
-In Pursuit of the Possibility of "Collaboration Classes between Elementary School and University"-

持田京子
(こども学科 准教授)

要旨 昔は人が火や水を求めて、同じ目的で炉裏や井戸に集まり、その周りで人とのふれ合いが自然になされてきた。子どもたちは地域の生活の中で、同じ目的で集まる様々な人々とふれ合いながら成長してきた。現代社会では学校や園や施設で様々な交流の場が設定されているが、利便さが優先される生活の中で、子どもたちの人とのふれあいの場は減少している。変化してきた子どもの生活の歴史を追った結果、地域における大学が小学校との地域連携授業の場を設定する必要性が導き出された。

【キーワード：地域連携授業・歴史的背景・子どもの姿】

I 緒言

文部科学省は平成27年、中央教育審議会で一億総活躍社会の実現と地方創生の推進のため、学校と地域が一体となって地域創生に取り組めるよう、内容の具体化を強力に推進するべく、「次世代の学校・地域」創生プラン¹⁾を策定してとりまとめている。「創生プラン～学校と地域の一体改革による地域創生～」において現状の我が国における高齢者人口の増加と生産年齢人口の急激な減少や、グローバル化の進展に伴う激しい国際環境の中であって、学校の抱える課題の複雑化・多様化、地域社会のつながり・支え合いの希薄化、家庭の孤立化などの様々な課題に直面していることを述べている。さらに「これからの教育課程の理念」として、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図るとし、教育課程の実施に当たって、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させると述べられている。

過去の子どもが住む地域社会において、連携はどのように考えられ実践されたのだろうか。それらの今後の課題は何だろうか。日本の歴史の中か

らそれらを検討し、浦和地域の文献も参照しながら考察することにする。

II 本研究の仮説

「地域における大学と小学校との連携授業は、地域に開かれた教育課程の一端を担い、子ども、大学生、教員、保護者の学びや成長に役立つであろう。」

研究方法

- ①「地域における子どもの生活の歴史と地域の連携」に着目した文献研究
- ②筆者の所属する保育者養成短期大学における過去2年間に実施した連携授業のアンケートからの検証

III 地域における子どもの生活の歴史

(1) - 1) 奈良・平安時代

片桐芳雄(1944 -)らは奈良時代(710 -)平城京の頃「8世紀になると文字を理解する民衆が徐々に拡大してきた」²⁾、その学習は木簡に繰り返し漢字を書きつけて覚えようとしたと述べている。すでにこの時代、村落においてもある程度文字教育などに関心があり、子どもの生活の中に文字が入っていたと考えられる。また『万葉集』の山上憶良の歌にみられるように、貧しくても子どもへの深い愛情を歌った歌が多くみられた時代でもある。森山茂樹(1940 -)らは『日本子ども史』

³⁾において、平安時代(794 -)末期の『扇面古写経』に描かれている子どもの姿から、当時の庶民の幼い子どもたちは、井戸の傍らで母親が洗濯したり、仕事をしている傍で過ごしていたと述べる。この頃の子どもの生活は学校などなく、一日中外をうろつき、大人のいるところには必ず子どももいたという。『古事記』からは子どもが篝の火をたく姿、『日本霊異記』では女の子が井戸の水をくむ姿が述べられ、また『今昔物語集』では幼いころから釣りを仕事にする、牛を追う、店にお使いに行く姿などもみられる。また行事にも子どもが入り込んでいたという。この時代では、子どもは大人の手伝いや、一緒に仕事をするのが多く、一緒に生活する中で特に取り分けた教育を受けるのではないが、生きていくために必要な学びを、周りから学んでいたのだろう。柴田純は『日本幼児史』⁴⁾において、この時代から中世にかけては、捨て子は律令で禁じられてなく、大人社会が優先される時代であり、子どもに対してはほとんど配慮されていない社会であったとも述べている。この時代、子どもを取り分けて守るなどの文化は見られない。また、皇族・貴族が実権を握ると、貴族中心の社会が安定し、貴族に奉仕する人の大学寮入学や、貴族子弟のための大学寮入学などが勧められ、庶民の子どもと貴族の子どもの生活の違いが既にはっきりとしていたとされる。

(1) - 2) 浦和地域の子どものに関する文献

野上有道(1967)は『奈良・平安時代の浦和』にて、「浦和の西部の大久保地域に条里制の施行があり、東部には牧場が重なり、機業養蚕が盛んであった」⁵⁾と想定して述べる。浦和の地域は穏やかで家族が安定して豊かに暮らしていたと考えられる。玉蔵院が平安時代創建と言われ、この地の神社に関する文献⁴⁾はあるが、地域における子どもの生活や教育に関するものは見当たらず、子どもとしての関心はみられなかった。

【考察1】 歴史的事実から地域における子どもの生活をみると、一般庶民の中で子どもが法に守られることはなかったが、残された絵や歌から子どもが自由に井戸端で遊んだり、親の真似をして仕事を覚える親子の在り方があり、「大人と一緒にいる生活」が各地域における自然な形だったと考えられる。教育は貴族中心で行われており、庶民に

は遠いものであったが、それぞれが漢字などを学ぶ文化があり、勤勉な庶民の生活の中で大人と共に過ごす子どもの姿がみえる。

(2) - 1) 鎌倉・室町(南北朝)時代

鎌倉時代(1192 -)から室町時代(1336 -)にかけて国家体制が整うと、子どもの社会的地位も明確になり、子どもの生活を決めるのは、親の身分やその時の立場であった。その中で公家の子どもは、その持つ伝統から、武家の子どもは武士の道を引き継いでいった。その後の戦乱の中では自己の才覚と努力で武家社会の地位を獲得できるようになった。⁶⁾乱世の時代では、寺院が武士の子どもの教育を預かる教育機関としての役割を担っていた。『神明仏陀』第16では寺院での子どもの生活や教育がよく表れていて、これらはおそらく室町幕府からであろうと森山⁷⁾は述べている。

また庶民の中でも『法然上人絵伝』で魚籠を持ち大人に続く絵など、この時代には大人のお供をして歩く子どもの姿が多くみられるようになったという。この時代の様々な職業に従事する人々を集めたものとして、室町時代にできた『七十一番職人歌合せ』においては、多様な職人をうたっている。これらの仕事を支えたのは大人であり、当時の子どもたちは、大人が生活している生活の中で、大人の仕事を意識しながら自然に受け入れつつ仕事を学んでいったのだろう。この頃の武士の戦いを題材をとって「琵琶法師」や「女盲」から語り継がれ、書き残されたものに「保元物語」「平治物語」「平家物語」「曾我物語」などがあり各地で人々が語りを聞くことで、共通の「武士」の理念が入っていったと考えられる。⁸⁾また、それらがさらに口承でその地域独自の話として囲炉裏端などで語り継がれ、子どもも幼い頃から、武将への憧れや、正義感、そして地域に対する愛着を、口頭伝承によって学ぶ機会が多くあったと考えられる。

五福伊八郎(2014)⁹⁾は、公家社会から武家社会への移行期にあたる鎌倉時代では、武家に社会を統制する秩序が求められたことを述べる。この時代は儒学の影響により、現実的で合理的な思想が発達し、歴史学など実証的な学問が芽生えている。五福は秩序は制度的なものだけでなく、儀礼・年中行事のような慣習的なものも含まれ、それが社会に浸透していき、それらが庶民の下でも意義付

けられ庶民の秩序として機能したと考えられることを述べる。この時代にすでに地域の大人の中では秩序というものが日常生活と共に浸透し、地域の子どもたちも次第に秩序を大人から教えらることで、日々の生活の中に浸透していったと考えられる。さらに室町時代（1336 - ）後半になると、村の寄合ができ、村のおきてなども決められたため、地域で子どもたちを育てる意識が強くなったと考えられる。

15世紀後期から16世紀初期にかけての絵師たちの書き物は、絵巻物から奈良絵本に移行する。それらは本格的な子ども用ではないにしろ、奈良絵本に用いられた題材には、「浦島太郎」や「一寸法師」など御伽草子類から取っているものが多かったことを玉置友子ら（2013）は述べている。^{10）}これらは口承によって子どもたちに伝えられ、日々の生活の中にあったのだろう。

柴田純（1947 - ）^{11）}は15世紀以降になると、名主などの有力農民の間では、固有の加盟や家産・家業を持つようになり、父系直系で継承されていくことを述べる。家の形成がすすみ、この新しい環境の中で子どもに対する意識が変化していく。すでに16世紀には、子どもたちに初等教育を行うため、旅の僧を村にとどめるといった慣行が成立することを述べている。地域において、庶民が単に行事などの交流だけではなく、学問を意識した取り組みもはじまっていった。

（2）－2） 浦和地域の子どもに関する文献

この時代、浦和でも地域の年中行事が行われていた。室町幕府では将軍が、七夕の歌を詠じ歌を書き、屋根に投げたといわれているが、それらは町屋の娘で大名に仕えているものが広め、それが各地に伝搬されたのだろう。^{12）}また 戦国大名の支配地に流行していたものに六斎市がある。^{13）}浦和でも二と七の付く日に市が開かれ、庶民も子どもも共に参加して見分が広がったと考えられる。

【考察2】 この頃になると、地域の中で子どもに関心を持ち、教育しようとする意識がはっきりと見られるようになった。その理由として家庭が身分や富を得るようになると、身分の差も明確になり、継承する自分の子どもへの関心が強くなることとがあげられる。その結果、子どもも大人への仕事の関心が強くなる。さらに戦国の武士の物語や

昔話の口頭伝承なども行われ、地域で子どもたちが集まり、交流する機会や家庭で集まり話を聞くなどの機会が増えて立身出世などを夢見る子どもも多くなったのだろう。キリスト教の伝来により、新しい文化が入り、地域によっては視野が広がっているのだろう。身分の差や貧富の差が大きかったが、地域での連携は深まり子どもたちを皆で見る、継承者である子どもを大切にすることといったことが浸透していったと考えられる。また、浦和地区に年中行事があり、大名に仕えていたものが家に持ち帰り広めたように、情報は中央から分散し、情報が入りやすくなっている。そして地域の中で様々な行事などが文化として親や子どもにも伝搬し、地域で共に行事を行うようになった時代だろう。

（3）－1） 江戸時代

江戸時代（1603 - ）になると、江戸幕府における社会の秩序は朱子学を正当とする儒教によって確立していく。そこで「小児は早くから教える」という考え方が広まった。吉宗の時代には幕府が直接民衆に教育の重要性を説いた。手習いは武士の子ども、庶民の子どもにとっても教育の出発点となった。この時代、庶民の家が確立されると、将来の家の担い手である子どもへの関心がさらに深まり、個の家だけでなく、村として地域で積極的に子どもに関わるようになった。村として子どもを養育すべきという考え方は領主側からも主張されている。^{14）}貝原益軒（1630 - 1714）が刊行した『和俗童子調』においても、この頃には子どもが「子宝」であることを一般化した幼児観があり、幼児への教化は、家の問題にとどまらず、社会的に寄与できるものを育てるという思いがあったという。^{15）}また幼児への対応も新たになり、1698年に刊行された『増補昼夜調法記』などの育児書も刊行され、地域の教育的な視点が、幼児にも向けられていることがわかる。中村惕斎（1629 - 1702）の『訓蒙図彙』などは図鑑となって調べ物ができるようになっている。

庶民家庭における読み書き教育では、『いろは板』という文字カードがあったという。女子教育の中では、手習いの初期段階で『百人一首かるた』『娘教訓和歌百首』（1780）にはその遊び方が書いてある。

武士社会では子どもは藩校や私塾に通い、親の

跡目を継ぐ修業をし、農村社会においては七歳を過ぎると子ども達は「子ども組」という一定の年齢で区切られた集団に入り、多くの時間をそこで過ごして、遊びや村の行事などに参加しながら、年長者からさまざまなことを習い学んで、村の子どもが育っていった。この時代の子どもたちは大人の社会の中で、子どものできる仕事を分担しながら、将来の職業に必要な職業意識や技術を身につけていった。¹⁶⁾

地域連携として、柴田純(1947 -)は子どもへの関心の高まりを、宝暦9年の地蔵堂再建事業をあげて、地蔵堂を「こどものあそびどころ」として村人が大切にしており、再建の際に快く賛同したことから述べている。¹⁷⁾これらは以前になかったことで、村人が協力して子どもを守ろうとする連携の思いが、庶民の中でも明確になったと考えられる。子どもの遊びとしても、江戸時代では、多くの子どもが寺子屋で学び、寺子屋は当時1万5000以上存在していたといわれる。¹⁸⁾この時代「奉公制度」があり、庶民の子どもたちは、寺子屋で4～5年過ごした後、一人前になるまでの期間として、丁稚奉公やお屋敷奉公に出た。また職人の弟子入りをする「弟子奉公」をする者もいた。この時代には、貧富の差が大きく、寺子屋に行かない子どもや病死する子どもも多くいた。しかし、歌川広重作の「風流をさな遊び」には、風揚げ、独楽回し、羽根つき、てまり付きなどが書かれている。また『浮世風呂』¹⁹⁾には、貝打ち、ままごと、人形遊び、まりつきなどが書かれ、この時代の町民の子どもたちも様々な玩具を使って、それぞれの地域で身分に応じてではあるが教育が進み、豊かに遊んでいたことがわかる。

江戸時代後半になると、早川雅子(2014)²⁰⁾は天保6年(1835)刊『孝行往来』(小川保麿)を挙げ、孝の考え方が、日常生活全般にかかわる道徳的意義を持ち、より家族結合を強める働きがあり、孝は社会的安定に寄与する概念であったと述べる。「恩に報いる」「教育が進む」そういった意味でもこの時代、地域間での連携意識が強くなっていったと考えられる。

(3) - 2) 浦和地域の子どもに関する文献

江戸に近く交通の便が良かったため、宿場町として発展した。また庶民の子どもへの教育の関心も早く、幕末期になると農民からの必要性も高まり、

経済的に恵まれない子どもも寺子屋に通うようになった。寺子屋は市内に30校あり、村史、神官、修験者、医師、武士などが教育に当たった。浦和は岩槻藩領であったので、岩槻藩の学者、教育者である児玉南柯(1746 - 1830)の私塾である遷喬館や教諭所の影響が大きかったといわれ、地域で多くの子どもが学びや交流を深めた。²¹⁾

田島地区の獅子舞は、1664年、將軍家光の道中安全、清めに奉仕したといわれる。多くの獅子舞があるが長男や相続人は一度は参加するため村の文化として、家族で大切にしている。例えば虫送りや夏祭りでは、本家に親戚が集まり、家のしきたりを代々伝えていった。これらにより、地域での学びは伝統的に次世代に伝えられたと考えられる。また江戸時代から麦を作っていた「麦打ち歌」「田植え歌」「通船舟歌(見沼通船堀1731年完成)」²²⁾などの歌や江戸末期の「駒形の祭りばやし」や「宿の祭りばやし」などの祭おはやしも庶民の間や子どもに浸透していった。

【考察3】 子どもは家の宝であり、教え育てることが大切である、という中央幕府の考え方があり、地域における庶民の連携と文化の継承が進んだ。幕府や学者の考え方が教育においてより明確になり、江戸や京坂を中心に進んだことにより、子どもを意識した地域連携が明確になったことが、浦和地域においても文化や伝統の伝承が多く行われるようになることより推測できる。学校制度は整備されていないが、人の成長の節目である「通過儀礼」は、その人物を地域社会が一個人として認める儀式として、地域で大切なこととして互いの子どもを育て合う意味でも積極的に地域においてとり行われていた。

(4) 明治時代

明治時代(1863 -) 1871年に文部省が創設され、翌年には学制が制定され、寺子屋だったところに小学校が開設されていった。当時は、学齢時の30%前後が就学していたといわれる。この時代は、武士も庶民も変わらずに学問の機会が与えられたため、どの階級であっても機会に恵まれれば、社会的な地位が与えられるようになった時代でもある。まだこの時代は、貴族社会と庶民の子どもの生活にもそれぞれ格差があり、経済的に苦しい

庶民は働き手である子どもを学校に取られ、「学校反対運動」も各地であった。²⁵⁾近代化により玩具なども輸入され明治時代に尋常小学校で風揚げ・独楽・まり・羽根つきなど伝統的な遊びが大いに奨励される一方、文明開化の波に煽られ、ライフスタイルの変換に伴い、一気に輸入された乗り物などのブリキ製品、セルロイド製のおもちゃ、ガラス製のビー玉、おはじきが世に出る。フレーベルの「恩物」によって幼児教育に積み木などの教育玩具が紹介されるのもこの頃で、大正時代にはモダンイズムによって、キューピー人形(1909)やフランス人形が流行し²⁶⁾、子どもの生活には格差と共に生活の急激な変化がみられる。

しかし近代化による人手需要は困難で、都会では形ばかりの小学校を作って8～9歳の少女たちを安い賃金で雇うようになったこともいわれる。明治初期の産業革命においては農村から都市部へ行くことは希望に満ちたことであり、若くして13歳から女子が女工として都会に出るようになった。上京した働き手の子どもたちは、じめじめした部屋で、通常学校からはもれて暮らしていたという。²⁷⁾

一方、幼児教育においては、1875年に京都の柳池小学校に付設した初めての幼児教育の園として「幼稚遊嬉場」が誕生した。この施設は1年半ほどで閉鎖したが、東京で東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)附属幼稚園(1876)誕生した。この頃の幼稚園は、地域で裕福な子どもたちが通う学校であった。明治23年、赤沢保育園(1890)は日本で初めて幼児達を預かり保育を始めた。生活困窮者の救済のために「貧困幼稚園」として、1900年に二葉幼稚園(1916年に二葉保育園と改称する。)が開設され、主に遊戯・衛生・生活習慣などの生活指導に重点をおいた保育が行われた。²⁸⁾この時代は家庭で祖父母や両親の周りで、生活の中で家事や労働力を期待されていた子どもが、学校や幼稚園、保育園に出て集団教育の中に囲われ、国家の近代化を推し進めるために急いだ時代でもある。

その後、日本は明治27年の日清戦争(1894)、明治37年の日露戦争(1904)から大正3年の第一次世界大戦(1914)まで戦争の時代になる。森田茂樹ら(2002)は明治時代から太平洋戦争敗戦までは教科書が最も子どもへの印象が多く残るのであると述べる。²⁹⁾その中でも、将校や兵士が

一丸となって国のために戦う素晴らしさを歌にしたものである「水平の母」は合唱コンクールの課題にもなって子どもたちが、常にうたうものとされていた。また戦争の映画なども「軍国少年」の思いをかりたてたと述べられている。³⁰⁾

この時代の子どもたちは村の中で、まだ外からの情報は入りにくく、さらに国が定めた明治19年に検定制度になった教科書は、子どもたちの思考方法そのものをつくる役割を果たしていた。地域全体で戦争に向かって団結、連携していた時でもあると考えられる。

(4) - 1) 浦和地域の子どもに関する文献

明治2年政府の郷学布告より、宿内5か所の寺子屋を本陣に集めて塾を開設した。明治5年に学制が公布され、教育制度が本格的に進められ、明治7年には師範学校も開設された。明治12年には教育令が公布されこれらを強化し就学率が向上した。³¹⁾明治16年、上野・熊谷間の鉄道が開通し、文明開化は浦和にも訪れた。上野浦和間は47分だった。明治25年に浦和は町制のもとに発達し、人口は6102人になった。明治41年埼玉師範学校の教師に着任した細木志郎がサッカーを始める。生徒と共に雑草を抜き、平にして手作りでコートを作り、学校だけでなくサッカーが浦和の子どもたちにも広がっていく。³²⁾これらの伝統は地域の住民たちに引き継がれ、「Jリーグ」が活躍を見せている現在、浦和のサッカーチームのサポーターはわが国でも有数である。

【考察4】明治時代(1863 -)は人口が増えた時代である。日本の工業化の時代であり、8割の農村人口は変化し、子どもたちは近代国家の国民として育てられた。この時代に子どもたちに希望を与えたのは学校教育だった。3回の戦争の過程では、学童疎開もあり激しい移り変わりの世の中でもあった。学問によって立身出世を願う子どもたちも多く、また学校教育が家庭に期待をもたらし、同じ方向を向き鍛え合うことにもなっていった。その中では親も子どもも同じ仲間同士であったと、野本は述べている。³³⁾そして、大人の教育的な目が幼児にも及ぶようになり、地域や家庭での期待が勉学的なものも含めて大きくなり、親子の思いが、世襲や立身出世などへ共通に求められる時代であったと考えられる。

（５）大正・昭和時代（戦前）

明治時代（1863 - ）末期から大正時代（1912 - ）にかけて児童の自由・自主・自発・個性を重視する大正新教育運動といわれる教育思想や教育実践が展開された。「児童の世紀」のエレン・ケイ（Ellen・Key 1849 - 1926）や「児童中心」の思想を展開したジョン・デューイ（John・Dewey）などの欧米の近代教育思想は、日本に「池袋児村小学校」などの新学校が設立させた。しかし入学させる親は多くが新中間層の家庭であった。³⁴⁾この時代の子どもたちの生活時間は農山村では草刈り、本読み、水汲みなど労働の持つ教育力の強さが目立ち、都市部の子どもは学習時間が長くなっていると小針誠（2007）は国民学校初等科の1942年の調査から述べている。³⁵⁾芦田恵之助（1873 - 1951）らは、生活綴り方教育の実践をはじめ、生活現実に直面して自らの課題を自覚する教育を施した。

戦時下体制に入ると、1941年には4月に「国民学校」1月は大日本青少年団が発足された。児童の全生活を挙げて「錬成」に向けるため、学校・地域・家庭との連携を強化し、放課後も少年団における地域活動が積極的に行われた。1941年の「学童疎開促進要綱」において、全国13都市においてほぼ一斉に学童疎開が行われた。³⁶⁾幼児疎開もおこなわれ、保母たちは子どもたちを守り続けた。都会にいる子どもたちの生活を大きく変えた学童疎開では、食糧難で飢えた子どもたちの姿があった。³⁷⁾教育や地域連携の目的は戦争であり、地域連携は政府の考え方のもとに「戦士育成」のために盛んであった。

（５）－１ 浦和地域の子どもに関する文献

大正13年には浦和小学校内に浦和町立少年図書館が設立された。³⁸⁾大正中期以降、子ども自身がテーマを選ぶ綴り方教育が重視され、児童文集づくりが各地で試みられ教師も研究会を立ち上げた。³⁹⁾幼児教育においても私立幼稚園が次々と開園され、海外の文化やキリスト教の影響もあり、幼児の教育にも目が向くようになり、様々な文化への視界が開かれた時期でもある。支那事変（1937）が起きると市防護団が結成され、3年後には切符制、配給制が開始され防衛訓練や竹槍訓練が盛んに行われ、子どもや地域の暮らしは戦時優先となった。

【考察5】 大正時代には新教育運動が起き、子どもたちに希望を与えた。また新しい海外の思想や製品、食事、生活習慣なども新しいものが子どもの生活の傍に出回り始めた。しかし戦争体制が進むと同時に、戦時優先の考え方に染まった。浦和の地域においても、防衛訓練や竹槍訓練が行われたように、地域は政府主導のもとに戦争一色に団結されていたと考えられる。

（６）昭和（戦後）・平成・令和

1946年教育基本法に基づきこれまでの教育制度が改正され、我が国の子どもたちは全員中学校卒業まで学校で学ぶことができるようになった。要保護児童対策、都市化が進み、団地が次々と建設された。1946年厚生省児童局が「地域における児童の健全育成」⁴⁰⁾児童指導班結成及び運営要綱、を作成して各都道府県に子ども会の結成を指示したことから積極的に各地域で子ども会が結成され、子どもはそれぞれの地域で活動する機会が多くなった。子ども会は、地域のすべての児童を全体として健全に育成することを目標としており、町内程度あるいはそれ以下の小地域における近隣の児童の遊び集団を組織化したもので他面では子どもの遊びの中に大人の介入が入ってきたと考えられる。これらの組織は、昭和44年4月に約2万5,000の組織があり約130万人が加入していた。

戦後の急速な経済復興で、2000年を過ぎるころには、身分や階級の差はほとんどなくなり、生活や娯楽を送り、また高等学校進学も可能となる。子どもたちは労働から解放され、子どもの生活様式は平等に過ごすことができるようになった。「教育ママ」という言葉が流行し、親が子どもの友達を決める、習い事の多さなどから地域での子どもの交流は次第に減少し「学歴」が優遇される。その間、農村から都会への人口流出が増え、農家の親も跡継ぎを育てるものが減少し、地域での仕事や伝統を担うものが減少した。

（６）－１ 浦和地域の子どもに関する文献

1946年文部次官通達「公民館設置運営要綱」により、浦和市内小学校7校に公民館が設置された。

⁴¹⁾当初、施設を使わない青空公民館もあり、それらは定期講座、子ども会、映写会、体育会など学びと交流の場が設けられた。

浦和市は戦後復興で昭和23年に教育委員会を設

置し、浦和市の予算で教育費を第1位に取り、教育活動、社会教育事業に力を置いた。⁴²⁾「ふるさとづくり」という観点から行政を進め、公民館、文化センター、青少年宇宙科学館などの学びの場が提供され、「浦和おどり」や「みこしパレード」など故郷に対するイベントも企画され行われ、子どもが街で共に学びあい、地域に生きる機会や場が提供された。⁴³⁾最近では神輿の担ぎ手などが減少し、地域の伝統文化をどのように引き継ぐのか課題となっている。

【考察6】 敗戦直後から復興そして高度経済成長期の過程で、地域社会が大きく変わっていることがみえる。その過程で子どもは仕事や労働から解放され、また貧しさからも一見は解放され裕福になってきた。平成時代（1989 - ）になるとパソコンやスマートホンなどの携帯で情報を早く得ることも可能になった半面、共働きの増加や核家族、一人親が増え、家族における会話が減り、親の仕事も知らない子どもも増えた。また「学歴偏重社会」であり、学校での学業や友達関係に息苦しさを感ぜ不登校になる子どもも増えてきた。⁴⁴⁾少子化により兄弟関係が減り、地域での子どもの関係も減少する。女性の社会進出が進み、学童保育や保育所に通園する子どもが増えたため、子ども自身の地域活動ではなく、集団教育・保育が地域連携の役割をも担っているように考えられる。片桐芳雄ら（2008）は核家族化が急激に進行し、戦後型の近代家族が大衆的に成立する一方で、地域の教育力が確実に落ちていることを述べる。⁴⁵⁾2012年には「子ども・子育て関連三法」が成立し、2014年には「放課後児童健全育成事業の整備及び運営に関する基準」などが制定され、法律による地域や子育てで支援が進んでいる。2019年には「保育料無償化」となり、預ける保護者が多くなるため、家庭地域での子ども同士のかかわりは一層減少すると考えられる。浦和でも、戦後に積極的に子どもの学びや交流の場を作り、公民館などの学校外の学びや交流の場が増え、自分の地域を知る機会が多々つくられてきたが、昨今では子ども会の存続の難しさなども聞こえる状況である。我が国の地域での子どもの姿の外郭を文献を用いて考察した結果、考察1～6からそれぞれの時代における地域の子どもの姿が見えた。その時代、様々な要因に

よって大きく動かされながらも、地域社会の中で大人と共に子どもが一生懸命生活してきた姿がある中、子どもが次第に大人の傍らから学校生活の枠組へと、子どもの世界と大人の世界の乖離への変化がみえた。そして、どの時代も中央の考え方に影響され、情報が早くなるほどその影響が強くなると考えられた。

【考察7】 浦和の子どもに関する文献から

表一 浦和の子どもに関する文献より

時代	主な事項	地域での生活・親の意識
奈良 平安	・仏教による護国思想の発達・国分寺の創立 ・浦和に12寺創建（行広寺 807年・延命寺 829年）	○農業の広まり・井戸端、囲炉裏端での交流・親の周りで親を真似て過ごす ○信仰が社会の規範である
鎌倉・室町 (南北朝)	・本町薬師堂・氷川神社 ・級本殿 1451年等・修験道の興隆 ・浦和市場公認・浦和宿 ・年中行事が行われる ・托鉢僧からの学び	○敬神の念が強い ○身分の差が明確、仕事の継承意識から子どもの存在を意識 ○市の開催・年中行事が行われるようになり、親子の地域生活や関わりが広がる ○口頭伝承を通じた交わり
江戸	・見沼代用水の完成（1727）・伊奈忠次の検地 ・中山道(伝馬制)完備 ・二・七の市 ・寺子屋の普及 31か所（本太神官石井寛が延命寺で開催） ・子ども組 ・俳諧、連歌の普及 ・花の名所サクラ草公園	○道や田畑などが整備され、庶民が情報を得たり移動しやすくなる ○寺子屋で庶民の子どもが学びその地での子どもの交流が深まる ○年中行事(八朔・端午の節句・七夕・敷入・十日夜・ひな祭り・等)を子どもと共に地域で行う ○子ども組で年中行事などを行ったと考えられる ○通過儀礼※地域で祝いあう
明治	・学制交付(1872) ・廃藩置県(宿から街へ) ・明治4年(1871)旧浦和県の庁舎に埼玉県発足 ・郷学施設を宿内に5か所開設 ・郵便制度施行(1873) ・武州鉄道開業(1883) ・特設電話組合結成 ・十二日まちの市	○学校が寺院を利用して創設され、学区の広域化を図った。しかし、年季奉公や子守日雇いなど、地域で家計を支えている子どもも多く、就学率は低い ○道や鉄道、橋の整備、通信手段の変化により、情報が早く出回るようになり子どもの世界も広がる ○埼玉師範学校教師がサッカーを広め現在に至る
大正 昭和 (戦前・戦中)	・関東大震災(1923) ・国民学校へ(1940) ・浦和県庁事開始(1934) ・空襲拡大で疎開者増加	○東京から疎開する知識人居住 ○戦争に勝つために少年団を結成 ○防空壕づくりなど国の勝利のために地域で協力を行い、その周りに子どもがいる

昭和 (戦後) 平成 令和	・新教育制度発足(1946) ・公民館の設置へ(1946) ・専業農家が大幅に減少 ・平成時代にかけて国際交流が進む。	○文教都市としての性格を強め、社会教育も進み、子どもも広い世界を知る ○経済成長の目的で政府主導の教育・が行われ、地域の子どもの自主的な交流は減少する。また地域の少子化、高齢化により異年齢や子どもと青年との交流の機会も次第に減る。次世代の担い手が減少し、郷土芸能の担い手も減少す
------------------------	--	--

子どもが成長するときに通ることに関する儀式＊初節句・七五三・お宮参り・お七夜・お食い初めなど（参考文献・図式浦和のあゆみ・ふるさと浦和・県都浦和の歴史・浦和今昔物語等、後掲）

浦和地区の各時代の地域社会における子どもの様子をまとめると奈良時代（710 - ）から平安時代（794 - ）にかけては仏教による護国思想が発達し、浦和でも寺院が12ヶ寺、創建されている。⁴⁶⁾この時代では仏教が国家の保護のもとで発展し、子どもの生活においても信仰が地域社会の規範となり、お参りなどでの交流もあったことが見える。鎌倉時代（1185 - ）は浦和においても当時の人が敬神崇祖の念に富んでいたと小島熙（1967）は述べる。⁴⁷⁾この時代の人々は、信仰心を規範としながら、自ら節制してすごし、子どもたちも、それらを見て人としての生き方を学んできた。また、鎌倉時代には庶民同士の中での年中行事が行われるようになり、七夕などの年中行事や祭りごとや決め事が生じて、それらを通して子どもたちは地域の中で生活を楽しみながら、周囲の大人から学んだと考えられる。1590年には豊臣秀吉の政策により市が開催され、「御免毎二七市場定杭」⁴⁸⁾が浦和にも残っている。近隣の村々から人々が集まり、大変にぎわったという。子どもにとっても市は定期的に楽しみから視野を開き、それを楽しみに地域で過ごしたと考えられる。

江戸時代（1603 - ）はさらに多くの通過儀礼や行事を通して互いに祝い合い、地域における家庭や子どもの存在を認めていたことが、例えば大久保領家の子守歌から推測できる。

大久保領家の子守歌⁴⁹⁾

坊やはい子だねんねしな 坊やの念円尾その留守に 糸取り
機織り染め上げて 三つのお祝い三つ身着せ 五つのお祝いに
や 四つ身着せ七つ本身に立つからは つくせ世のため 国の
ため

上記の歌のように、子どもが成長する際に必ず通る通過過程を家庭や地域の周囲で祝うことは、地域社会で連携して子どもを育てることにつなが

る。またこの時代、自主的に民間から始まった寺子屋は、様々な知恵を出しながら発展し当時浦和でも30はあったという。⁵⁰⁾浦和において地域社会は、地域の中でのしきたりや決まりがあり、それらを中心に子どもたちも学び、生活をしていた。この時代、無論貧富の差があり、命を失う子どもも多かったともいわれている。

明治時代（1867年 - ）になると郷学校が玉蔵院に開設され、廃藩置県が行われ1869年には浦和県となり、さらに学制が公布（1872）された。明治6年には学校改正局が置かれ師範学校が始まり、文教都市としての道を歩む。⁵¹⁾地域のしきたりや「森の都」としての伝統文化や郷土の語り継ぎは豊かにされていたものの、その内容を地域で子どもたちが主体的に担うよりは、豊かな文教都市として、学校や行政が担うように移行していったと考えられる。

大正時代（1912 - ）は県立師範学校（1913）、浦和高等学校（1922）などが開港され、幼児教育においては私立麗和幼稚園（1912）、浦和幼稚園（1925）、社会教育においても浦和公民学校（1923）の設置、県立図書館の開設（1924）など、華々しい教育振興がみられた。⁵²⁾さらに政府の意向を受け、地域で担ってきた子育てや地域交流などを、子ども会という組織が担う場面が広がり、地域の子どもの遊びの中に大人の意志も反映されるようになる。

戦後（1945 - ）は復興のために、豊かな自然を守ると同時に団地ができ、東京都北方の衛星都市としての役割を果たしている。それと同時に、昔からの習わしである地域や家庭で行う「カビタリ餅」「えびす講」「十日夜」「荒神様」「お日まち」などの年中行事⁵³⁾を子どもたちが知らない時代となった。

実際に、浦和本太地区に住む84歳の女性の方（宮城道夫に琴を習っていた女性）にインタビューをしたところ、50年前は「子供会」というよりも、例えば「花火をやるよ」といった地域の人の、ひと声で、子どもたちが集まり楽しんだという。「あ・うん」の呼吸が地域の人々の中でできていて、地域で子どもを育てる意識が主であったという。しかし、現在は、声をかけても子どもがいない、忙しいなどで集まることも少ない。

経済成長を遂げている現代において、以前の生

活に子どもたちを戻すことはできないが、何らかの手立てで子どもが地域や学校で豊かに過ごすことを考えることは必須であると考えられる。

IV 大学における地域連携授業の可能性を探る

過去の我が国の子どもの生活は、どのように考えられきたのだろうか、子どもの生活と地域とのかかわりの歴史を検討した結果、中世においては子どもが特に注目されることもなく、大人の傍で過ごしており、大人の仕事が見える中でそれらを真似て生活の中にいることが見えた。近代になり教育が国家主導でなされるようになると、大人は子どもの生活を地域社会ではなく、学校中心に置くようになってきた。教育の考え方も同じ方向を向くため、地域創生や独特の創造ある地域活動なども難しくなってきたと考えられる。そのような結果、現代に進むにつれて、地域の中で行われてきた行事も、公民館や役所が入ることで、住民や家庭の主導力が少なくなった。さらに現代では核家族化が進み、女性が社会進出をするようになったため、相まって地域社会で子どもを育てることが難しくなってきた。国が主導権をもって方向性を決め、学校が運営され、経済が動く中で地域性は薄れ、子どもの関係性が狭まれていった感は否めない。

福田アジオ（1993）は現代の教育を、柳田国男（1875 - 1962）と大藤時彦（1902-1990）の考え方を例として「もともと児童は大人の世界から隔絶したものではなく、大人と群行動を共にするものであり、そこに教育があった。それが、児童が児童として特別扱いするようになり、実生活で特別な責任や役割を与えられないままに成長することになり、社会に出るときに経験不足、知識不足を痛感することになる。研究の面でも、子どもの世界を特殊の世界として見過ぎている」と批判的に述べる。⁵⁴⁾

森山茂樹ら（2007）は、現代の子どもの学校生活は「労働から解放されていること、家庭で物質的に満ち足りた生活、勝手気ままが許されていること」で、学校を息苦しいものと感じさせるため、家庭でも地域社会でも、社会の中で仕事をして生活していくという自然な心構えが形成される仕組みを作る必要性を述べる。⁵⁵⁾さらに、大人たちも変わる必要を述べる。「日常の生活は大人とのかかわ

りの中で営まれている。成長する生命が未来に向けて歩いていくために必要な心の糧を、大人と過ごす日々の生活の中で受け取っていく」必要性を述べる。河村茂樹（2007）はデータが語る地域の課題として、「学校は子どもたちの対人的な体験学習が少ない」という。⁵⁶⁾そして効果が確認された教育実践の方法を全国から集めて体系化する必要性を述べる。

これらの研究から、社会の変化の中で子どもたちが大人と隔離されてきた結果、子どもが地域社会の中で豊かに生きることが難しくなっている面が示唆される。しかし、どの時代にあっても、子どもは地域で生活し、学び、生きていく。したがって、もう一度地域と子どものつながりと、その手立てを再考する必要がある。

内閣府では、家庭や地域との連携・協力の推進として「家庭や地域の教育力の低下を前提に、学校、家庭や地域で果たすべき役割のすべてを学校が補完することはできず、仮にできたとしても、子どもの心の満足は得られないなど、家庭の教育力は学校で代替できる性質のものではないと考えられる。」⁵⁷⁾と述べられている。そのためにも学校と地域との連携体制の構築を図ることは喫緊の重要課題である。また同様に大学の職場体験活動などの学校外での学習や体験活動の実施も求められている。そのためにも各学校がその特色を生かして創意工夫を重ね、長年にわたり積み重ねられてきた教育実践や学術研究の蓄積を生かしながら、児童や地域の現状や課題を捉え、家庭や地域社会と協力して、学習指導要領を踏まえた教育活動の更なる充実を図っていくことが重要であろう。

筆者の属する保育者の養成校であるS短期大学は市の[学び合い夢プロジェクト]の協定のもとに、近郊の園や小学校と連携して、授業時間（幼児教育者論）で地域の小学校と連携をした授業を継続して行って7年目となる。⁵⁸⁾一般的に現代は核家族が多く、兄弟も少ない小学生にとって地域にある大学生と共に学ぶことは、学習面において1対1のサポートや指導、生活面においても「挨拶：身支度：食事など」のサポートや指導、人間関係の形成にとっても、地域のお姉さんと一緒に過ごすことには効果があると考えられる。また保育者を目指す大学生にとっても小学校を知る、児童の発達や生活を理解する、実際に親しみを覚えて一緒

に遊ぶ、生活を共にする、などは非常に学びになることであり、将来保育者になるためにも役立つことである。さらに、経験の少ない大学生にとってこれらの活動は大きな自信となると考えられる。

2018年度 学生へのアンケート結果

小学校との連携授業が学びになった。と回答している学生が112人中90人が学べたと述べている。その詳細は、発達・コミュニケーション、生活指導、運動、安全などである。

2018年度 小学生へのアンケート結果

楽しかったと述べている児童が48名中40名、6名がやや楽しかった、と述べている。

これらはさらに詳しく統計を取り検証していく必要がある。

山田浩久ら（2018）は「地域連携活動の実践」において、様々な地域連携活動の研究例を挙げた上で、学生が地域連携活動を行う意義について、「地域を見る目を持つ人材育成」⁵⁹⁾について述べている。そして大学の地域連携は、地域全体が地域連携を取り組もうとする中で大学が主導して取り組む必要性を述べる。その上、地域へのかかわりは、大学が有する公平性と中立性に基づいて行う必要性があり、これらはさらに、学生の教育に対しても有意義であることを述べる。

以上、「(仮説) 地域における大学と小学校との連携授業は、地域に開かれた教育課程の一端を担い、子ども、大学生、教員、保護者の学びや成長に役立つ」という仮説のもとに文献研究、とそれに伴うアンケートを行った。その結果、現代社会において子どもが地域で自主的に遊び育つことが難しく、囲われた中で大人の保護の元で過ごすことが多かったことが分かった。また大学生も、地域での人との交流の経験不足が多く見られ、交流授業で大学生と小学生が自主的に学びあう必要性が見いだされた。

Ⅲ 今後に向けて

地域における子どもの歴史を探ることで、人と関わる経験の少ない子どもたちが増えていることが分かった。地域に根差して豊かに生きるためには、学校で決められた人間関係で過ごすだけでなく、開かれた場が必要である。これらの何らかの糸口を実現するには様々な困難があり、周囲の理解を促すことが必要であろう。浦和地区において、

現在サッカーのJリーグ「浦和レッズ」の応援がどこの地域よりも盛り上がりを見せている。これらは明治41年に埼玉師範学校に着任した細木志朗氏が、当時あまり知られていなかったサッカーを、校庭のわずかのスペースの雑草を抜き平らにして、自分たちでゴールポストを作る、といった日々の繰り返しの努力からなされたものである。それらが長い時間をかけて、ひとりの教員の努力から発したものが、次の世代に受け継がれて、今地域の中で根付き、実っているのである。そこでは努力と共に、長い時間をかけて、子ども同士の努力、教員の努力、保護者の努力や地域の応援があったからこそ地域にサッカーが根付き、レッズとサポーターの関係性ができたのである、このような種まきは地域において今、何よりも必要とされていると考える。すぐに結果は出なくても、地域に関係する一人一人が努力することで、少しずつ連携が生まれるのであろう。大学の教員がその地域に属していることは当然のことであり、長い目で将来を見据えて地域に根差しながら研究していくことが求められるのではないだろうか。

今回の研究では、まだ文献も外郭しか把握できていないため、さらに焦点を絞って考察していく必要がある。またアンケートもさらに絞って統計を重ねていく必要性が見えた。今後も「連携授業」を実施しながら検証を進めたいと考える。

謝辞 これらの研究を進めるにあたって、協力いただいた教育委員会、多くの小学校の児童、教員、父兄の皆様にご心から感謝いたします。

【引用・参考文献】

- 1) 「次世代の学校・地域」創生プラン」文部科学省、平成28年1月、文部科学省ホームページ
- 2) 「教育から見る日本の社会と歴史」片桐芳雄・高橋美穂・高木雅史・清水康幸 八千代出版株式会社、2008、pp14
- 3) 「日本子ども史」森山茂樹・中江和江 2002、平凡社 pp57 - 59
- 4) 「日本幼児史」柴田純 2013、吉川弘文社 pp89
- 5) 「奈良・平安時代の浦和」野上有道、1967、浦和郷土史研究会、pp314
- 6) 「日本子ども史」前掲pp94

- 7) 同上pp137
- 8) 同上pp96
- 9) 「鎌倉時代の武家社会における誕生異例と社会秩序」五福伊八郎 佛教大学大学院紀要 42pp2014
- 10) 「絵本の歴史」玉置友子『日本における子どもの絵本の歴史』: 千年にわたる日本の絵本の歴史 絵巻物から現代の絵本まで その 1. 平安時代から江戸時代まで 大阪大学紀要 44 P.81-P.98
- 11) 「日本幼児史」前掲pp114
- 12) 「私たちのふるさと - 本太のいいつたえ」浦和市教育委員会, 浦和市元町公民館, pp30, 1980
- 13) 「浦和3万年」相川宗一(市長) 2000, 浦和市総務部総務課2) pp14
- 14) 「日本幼児史」前掲pp121 - 124
- 15) 「日本幼児史」前掲pp129
- 16) 「教育と子どもの社会史」小針誠梓出版社 2007, PP19
- 17) 「日本幼児史」前掲pp125
- 18) 「教育と子どもの社会史」前掲pp20
- 19) 「日本子ども史」前掲pp197
- 20) 「近世後期における民衆の孝道德の源流をめぐって」—『古文孝経孔子伝』と貝原益軒を中心に—早川雅子 目白大学人文学研究紀要 (10) 1 - 13, 2014
- 21) 「浦和今昔物語」小島熙pp223., 草土社, 1967
- 22) 「ふるさと浦和」吉松昇編集松下興産株式会社 1998, pp101 - 110
- 23) 「教育から見る日本の社会と歴史」前掲pp31
- 24) 「幼稚園における子どもの通過儀礼に関する研究」大野 歩, 岡花 祈一郎., 真鍋 健 [他] 幼年教育研究年報 32, 87-94, 2011
- 25) 「近代日本児童生活史」野本三吉 社会評論社, 1995, pp93
- 26) 「おもちゃと人との関わり—おもちゃの歴史」おもちゃのまちバンダイミュージアム, 金井正雄・鍛冶美行。2019, jsmcwm.or.jp/edit/kurashi/04/014kanai.pdf 一般社団法人廃棄物資源学会
- 27) 「日本子ども史」前掲pp83
- 28) 「日本の保育の歴史」汐見稔幸・松本園子・高田文子ほか, 勝手気ままな成果」萌文書林, 2017 巻末資料
- 29) 「日本子ども史」前掲pp309 - 310
- 30) 「私たちのふるさと - 本太のいいつたえ」前掲pp43
- 31) 「現代日本児童生活史」前掲pp219
- 32) 「ふるさと浦和」前掲pp72
- 33) 「現代日本児童生活史」前掲pp219
- 34) 「教育と子どもの社会史」前掲
- 35) 同上pp99
- 36) 「教育から見る日本の社会と歴史」 pp159
- 37) 「日本の保育の歴史」前掲pp213
- 38) 「浦和の今昔物語」前掲pp356
- 39) 「浦和のあゆみ」小野文雄監修ぎょうせい, 2002pp174
- 40) 厚生労働省「厚生白書昭和44年度版」第1章 児童と家庭の福祉 第3節 児童の健全育成 1 家庭における児童の健全育成 (3) 家庭児童福祉のための地域活動の助長
- 41) 「私たちのふるさと - 本太のいいつたえ」前掲pp57
- 42) 「浦和今昔物語」前掲pp372
- 43) 「浦和3万年」前掲pp21
- 44) 「教育から見る日本の社会と歴史」前掲pp206
- 45) 同上pp194
- 46) 「浦和今昔物語」 pp67
- 47) 同上pp83
- 48) 「県都浦和の歴史」小島熙浦和郷土の会, 1942, pp26
- 49) 「ふるさと浦和」前掲pp102
- 50) 「わたしたちのふるさと」前掲pp43
- 51) 「図説 浦和のあゆみ」浦和市総務部行政資料室, ぎょうせい, 1993, pp166 - 167
- 52) 「浦和今昔物語」前掲pp355 - 356
- 53) 「わたしたちのふるさと」前掲pp21 - 40
- 54) 「民俗学と子ども研究: その学史的素描」福田アジオ, 国立歴史民俗博物館研究報告 54 巻 154 - 162 Bulletin of the National Museum of Japanese History
- 55) 「日本子ども史」前掲pp327
- 56) 「データが語る過程・地域の課題」河村茂樹 2007, 図書文化社, pp120

- 57) 内閣府「低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書」(平成19年2月)
- 58) 埼玉純真短期大学研究論文集 (12) 79－88
持田京子・金子智昭・林真麻
- 59) 「地域連携活動の実践—大学から発信する地方創生—」山田浩久ら 2019, 海青社